

# 梅毒流行の注意喚起

## 1. 現在の流行状況

梅毒は1987年の一時的流行を最後に、2012年までは年間500～900例で推移していました。しかし、2013年より1,228例（前年比1.4倍）、2014年には1,671例（前年比1.4倍）と年々増加傾向が続いています。先天梅毒は2014年に増加し、前年比2.5倍でした。（2015年1月15日現在）（厚生労働省）。

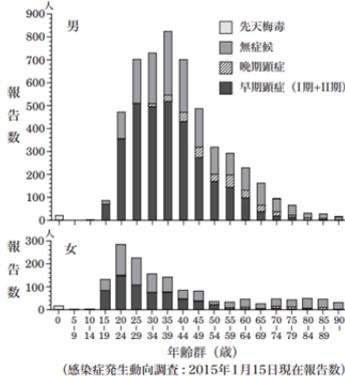
こうした背景の中、さらなる梅毒流行の可能性や先天梅毒の増加が懸念されています。実際に、2015年第1週～第38週までの先天梅毒の暫定報告数は11例でした（2015年10月8日集計暫定値）（国立感染症研究所 先天梅毒の動向 2011年～2014年）。また、2015年には全国各地での先天梅毒症例の報告も散見されており、今後の注意が必要です。

表1. 梅毒患者の報告数と病期別内訳, 2008～2014年

	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年
総報告数	831	691	621	828	875	1,228	1,671
早期顕症 (I期, II期)	456	393	341	433	475	692	950
晩期顕症	66	44	41	54	48	66	80
無症候	300	249	238	335	348	466	631
先天梅毒	9	5	1	6	4	4	10

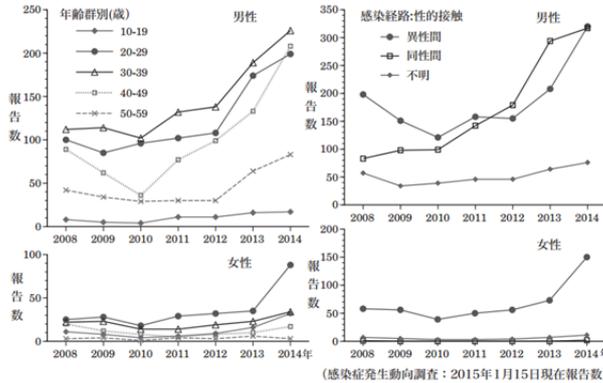
(感染症発生動向調査: 2015年1月15日現在)

図2. 梅毒患者の病期別性別年齢群別報告数, 2008～2014年



(感染症発生動向調査: 2015年1月15日現在報告数)

図3. 早期顕症梅毒 (I期, II期) 患者の年齢群別・感染経路別報告数, 2008～2014年



(感染症発生動向調査: 2015年1月15日現在報告数)

病原微生物検出情報 Vol. 36 NO. 2 より引用

## 2. 先天梅毒

妊娠初期の感染症検査がすべて陰性であった妊婦さんが、妊娠初期のオーラルセックスにより梅毒に感染し、「性交渉がなかった」と言っていたにもかかわらず、出生児が先天梅毒と診断された症例が報告されています。

梅毒は多くの先進諸国同様、日本でも減少傾向にあったため、昔の病気と考えられていました。しかし近年、欧米では男性と性交渉を有する男性（Men who have sex with men: MSM）を中心に感染が広がっていることが報告されています。日本でも梅毒は10～40代の男性を中心に、同性間性的接触感染が急増しています。しかし、同じMSMが感染者の多くを占めるHIV感染症の新規報告数が横ばいとなっていますが、梅毒との関係は不明です。女性も増加傾向にあり、MSM間での流行から感染が波及している可能性があります。また、先天梅毒も今後増加してくる可能性があります。

このため、妊娠初期検査で梅毒が陰性であっても、妊娠中に梅毒を疑う症状を認めた場合には、問診と血液検査再実施などを行うことが重要となります。また、「性交渉がない」といっていても実際はオーラルセックスをしていることもあり、問診が重要といえます。梅毒は診断されれば治療は比較的容易ですが、診断の遅れから進行し後遺症が残ることも稀ではありません。なお、梅毒の予防には、100%ではないもののコンドームに効果が認められています。

会員の皆様には、この状況を踏まえ注意を喚起するとともに、妊婦教育を徹底し、早期診断・早期治療に努めることが望まれます。